

槐

かい

岡井省二創刊

平成19年11月号

平成十九年十一月一日発行 第十七巻第十一号 通巻第一九七号 毎月一回一日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



金 風

高橋将夫

大花野爺と呼ばれてをりにけり
亡き父の道具箱から虫の声
白露の風に触れあふ音なりし
秋風に吹かれて軽くなる心

法師蟬何かを語りかけてをる
さまざまな思ひを胸に鳥渡る
シナプスの点滅なりし秋の星
天の川ほどの輝き命の火
食うて寝て笑ひ爽やかなりしかな
蛇穴に入りてゆつくり考へる
金風に包まれてゐる密寺かな

カルフォルニアの木の葉木菟

柳川 晋

藍の花ゴールドラッシュを見てきたる

サクラメント近郊ゴールドラッシュ跡四句

野葡萄にクレメンタインの木霊して

クレメンタイン川で溺れて死ぬ金鉱堀の娘の歌あり

あじさゝるや金鉱長者の館跡

何と鳴くカリフォルニアの木葉木菟

移民二世の家七句

裏庭に鹿集ひ来し夕餉時

終戦日キャンプにありし村八分

キャンプ日系人収容所

百日紅咲きて名を知らざる二世

君知るやどんぐりころころどんぶりこ

帰国して鯛鮎食ふと言ふ翁

少女子の顔ほどもある新松子

特別作品

白木槿 Dead End は行き止まり

サクラメント二句

この国の力は秋の土の色

もろこしや谷間ヴァリアーと呼ばれてゐる大地

夕ホ湖三句

どうしても跣で触れてみたき湖

渡る気のもう無ささうなはぐれ雁

北米の小夜橋 捜す親子かな

サンフランシスコ、カルロス地区二句

六色の虹の旗あるゲイの街

曼荼羅華尻ポケットのチーフかな

アルカトラス島二句

海霧に町の声聞く囚人島

ペリカンの雁行を見し島の秋

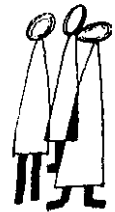
槐安集

水野恒彦

盆唄や夜の方へ水流れ行く
流灯の左岸に寄りてみな還る
よき男たらむと菜虫取りにけり
父の木の蝸のまたはじめから
しほがまをほろほろこぼす秋の暮

延広禎一

金星や海嶺越ゆる帆立貝
源氏名の千社札ある白露かな
天網を繕ふ迦楼羅賢治ノ忌
北面の檜皮に群るる螢かな
いざ狂へされば品しなよく阿波踊



加藤みき

くれなるの潮のあげし秋のこ糸
砂文字に深き影あり盆の月
足跡に立ちあがりたる車前草
鬼の子の夜な夜な出会ふ松のこ糸
大呆けに笑ひころげし残暑なり

石脇みはる

雁渡し口のぐるりのきな粉かな
嶺々拝す青烏瓜ぶうらりと
刀豆やもぐら通りしあとがある
立秋の身近かにしたる一書かな
呼ばれるて鶏頭花へと近づきぬ

中島陽華

栗栖恵通子

狐火や紙衣の音は藤十郎
丹田の無意識月下美人咲く
九会曼陀羅煮え繭ついと寄せらるる
うつぼのごんぼ巻き輪切り大暑かな
琴引のうつぼ干しある秋の浜

絹針の落つる音する夜の秋
不知火にせびら向けたる箱枕
省二忌の丹にの吊り橋を渡らんか
愛染の胸つくるはず秋螢
一山は拳のかたち秋高し

竹内悦子

大島翠木

秋扇金色堂に入りにはけり
老犬の死や水無月の曼陀羅華
本日休診歯科医院の酔芙蓉
かたつむり鳥海山の麓かな
鮎茶漬食うべ暴悪大笑面

竜にならんと遠雷へ蛇泳ぎゆく
ポニーテールの君走りよる端居
流燈会の人は身軽になれぬかな
底紅の落ちしは月の大地なり
月見草ははあるやうに月に揺れ

雨村敏子

菩提樹の花五剣山の山の影
丸茄子 赤茄子 虎溪 三笑
七月の声明海中に音聞こゆ
蟻地獄活断層の真上なり
マンモスの尾骨の化石天の川

小形さとる

アマリリス咲き金輪際しずかな家
まざまざと熟れてみせたる杳かな
土壇場と団十郎とかちわりと
宝塔のしほからとんぼ吾に付く
なすび漬言葉寡すくなになりにつけり

本多俊子

峰雲の一座熊野灘を跨ぎ
夏木立物理教師と並びけり
八月や飛行時計を胸に置く
天つ空雁わたりゆく響きかな
火の国の茜に反りし鷹の爪

天野きく江

立秋や両手に余る貝の殻
病葉の穴だんだんに振れけり
蟬死すや次々流れゆきし雲
研ぎ澄ます大脳皮質初ちちろ
東方へ廻す地球儀桐一葉

槐市集

瀬川公馨

まつびるま錢勘定と蟬のこゑ
蜻蛉に白球たまの行方を聞いてみな
大ごゑで夏花摘みつつ唄ふなり
海賊の牙城なりけり夏の海
入道雲にゅうどうにへそくり持つて行かれけり

十川たかし

一椀のうどんも食はず魂祭る
草かげの水飛びたてる石たたき
雌日芝の荒地に秋の風出たり
山へ帰るおはぐる蜻蛉とすれちがふ
やいと花へくそ葛でもよろし

醍醐季世女

夕されば風の通ひ路夏薊
藪からし垣を被ひてしまひけり
夕化粧咲き出づる頃風立ちぬ
天と地を鶉色に染め花槐
立秋の御坊水琴窟の音

竹中一花

猫と息鎮め野分を送る夜
丈低き朝顔蒼き光テ放つ
大蓮の蕾ぼこぼこ湖の中
コスモスの波にただよふ共命ぐめやうしちよう之鳥
良なく回る口舌蓮くぐめ之鳥の台仏教界の想像上の鳥かな



槐集

高橋将夫選

淵よりも浅き流れの涼しさよ
枚方 中野 京子

泥に 足 天に 掌 蓮 葉 風

影のなき夏の真昼と燭の夜

掌を合はす闇より螢の火

記されざる歴史の多し蟬の殻

初螢北の星座と息の合ふ
宗像 南 一雄

羅をまとひ胎蔵界に入る

卯浪うつ礁のしづき風信帖

青葉木菟天の岩戸の闇うごく

白桃を賽の河原で剥いてをり

英彦山や嵐の前の月見草
枚方 谷村 幸子

千振を噛みし顔にて長者原

桐ひと葉青の洞門の鑿の跡

一望の九重連山秋の風

ゆつくりと跳ね橋あがる盆の波

虹の根のしづきを浴びてをりにけり
枚方 近藤きくえ

同行二人真さをなる茅渚の海

空海の生誕地なり土用凧

地球儀に戦ふ国を指す晩夏

ちちろ鳴く赤膚焼の窯の闇

首筋の汗拭かずぬて泣きとほす
京都 竹中 一花

くれなゐの宵を稲穂の匂ふ駅

青花や水車の飛沫頬に受く

オーボエの音に舞ひ降りし龍田姫

涼しさや櫟の樹液黒光り

コバルトの空さかしまに空蟬よ
岡崎 松原 仲子

地の果のしづけさにをり昼寝覚

大瑠璃の杜の木魂でありにけり

蟬生る羽根のびるまで私のもの

炎帝や石となりたる深海魚

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

淵よりも浅き流れの涼しさよ 中野 京子
淵と浅瀬では深さや流れの速さだけでなく、涼しさにも違いがあるという。

羅をまとひ胎蔵界に入る 南 一雄
胎蔵界では羅、金剛界では白地でいるのがよいと作者はどうやら悟ったようだ。

千振を噛みし顔にて長者原 谷村 幸子
長者原のイメージと千振を噛んだ顔を対比してみてもいい。

虹の根のしづきを浴びてをりにけり 近藤きくえ
海にかかる大きな虹の一端に焦点を当てた景。虹の根元を洗う波が暗示するものは何か。

首筋の汗拭かずぬて泣きとほす 竹中 一花
一寸の虫にも五分の魂。必死で泣き徹す子の姿が浮かぶ。

地の果のしづけさにをり昼寝覚 松原 伸子
昼寝から覚めてぼんやりした状態。地の果の静けさに脱帽。

目の前の草かげろふの遠き色 近藤 喜子
目の前なのに、その草かげろふのは遙か遠くの色だという。

天の川より零れ落ちたる砂金 岩月優美子
天の川の輝きは、ときに砂金のきらめきにも見えよう。

人の世は七色玉葱きざみをる 近藤 公子
人の世は七色。さらに、闇や人には見えぬ波長もある。そんなことを考える一方で、玉葱をきざむ現実がある。

高瀬舟曳いてきたりし星月夜 瀬川公 馨
高瀬舟は森鷗外の小説を連想させる。星月夜のメルヘンとのギャップが痛快。

蓮の実の飛ぶにほどよき今朝の風 十川たかし
蓮の実にも飛びごろがあり、ほどよい風もあるのである。

稔田の間の草田も波打てり 大山 里
稔田の稲穂が波打てば、伸び放題の休耕田の草も波打つ。そこでは稲穂も雑草も一体。

秋螢穢土を離れてゆきにけり 西村 純太
厭離穢土、欣求浄土。秋螢は穢土を離れ、向うは浄土か。

山女釣り地図の折り目の現在地 久保東海司
溪谷深くまで踏み込こんだのだろう。地図で現在地を探していったら折り目のあたりだという。ただごとの面白さ。(以下略)